

ウミウミの海兵は平和
を愛す。

豆乳大納言

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死なない男カイドウの悪魔の実がウオウオと知った瞬間、社畜の脳裏に溢れ出した妄想。

「ウオウオが許されるのだからウミウミも許されるやろ」

本作は作者の脳裏に溢れ出した妄想を文字に起こした二次創作小説です。

「細かいことは海王類の胃の中」な作風な上に、不定期投稿（予定）ですが、それでもよろしければ是非お付き合い下さい。

※作者はONE PIECEニワカですが、原作は大好きです。ただ、主人公の設定

上アンチ・ヘイトタグがつきますので、ご了承ください。

※また、誤字や表現の修正を適宜行っています。

10月31日追記

この妄想垂れ流し小説に過大な評価をいただき、ありがとうございます。今後とも、みなさまに少しでも面白い小説を提供できるよう努力していきます。評価バーが赤いです！やったネ!!

目次

序章 転生者が平和を愛すまで

一話 ウミウミの海兵は歩み始める

1

二話 ウミウミの海兵は見入られる

18

三話 ウミウミの海兵は能力を知る

27

四話 ウミウミの海兵は戦闘を知る

38

幕間の一コマ

55

第一章 ウミウミの海兵は正義を成す

一話 ウミウミの海兵は対面する

61

二話 ウミウミの海兵は修行に勤しむ

+

α

70

三話 ウミウミの海兵は相まみえる

76

序章 転生者が平和を愛すまで

一話 ウミウミの海兵は歩み始める

○月?日

悲報。

俺氏、主人公が嫌いすぎる世界に転生した件について。

ただ、幸いなことに、その嫌いすぎる主人公本人に転生することはなかった。

今は、ちょっとだけ裕福な元海軍将校の両親の元で、悠々自適のシヨタ生活を過ごしている。

……察しの言い方ならもう俺が転生した世界がわかったと思う。

というか、『海軍将校』というワードが作中に絡む作品なんて、俺が転生したこの作品か、艦こ〇くらいしか存在しないと思う。

そう俺は、女の人の美醜の差が激しかったり、人体骨格無視してたり、ただの人間が身長3mになったりする上に、たった二年で筋肉ゴリゴリになることから、空気にプロテインが含まれていると揶揄されるあのONE PIECEの世界に転生してしまっ

たのだ。

どうせなら、同じジャンプ作品でも呪術廻戦とか、ジョジョがよかった。

というか、死んで転生できるなら、せめてあのクソ上司に退職届を叩きつけてから死にたかった。と思う今日この頃だが、生まれてしまったものは仕方ない（パワーワード）。俺には、現状この第二の人生をエンジョイするという選択肢しか存在していないのだ。

それに、転生のシヨックが知らんけど、前世の記憶ほとんど無いしな!!!

あるのは、うつすらとしたONE PIECEの知識と生活に必要な各種技能の知識くらいだ。あと、自分がアニオタだったことやアニメ関連の知識はガッツリ覚えてる。

社畜だったこともな。

そんなことはさておき

閑話休題。

さしあたって重要なのは、俺の人生設計についてだ。

なにせ、エンジョイするなんて言ってみたが、この世界はリアルに一般人に人権が存在しない。

天竜人に会えば、奴隷ルート。

一般的な海賊に会えば、紆余曲折のうちに奴隷ルート。

善良な海賊に会ったところで、天竜人や一般海賊にエンカウントしたらやっぱり奴隷

ルート。

はあくなんて人の命と尊厳が軽い世界なんでしょう（ブチギレ）
考えすぎ？いや、よく考えてほしい。

一瞬で地面を十回以上蹴ってその反動で高速移動するなんてことが、現実でできるか？いや、できない（反語）。

だが、事実として、この世界にはそんな輩がゴロゴロいる。一部の上位陣に至っては、カンタンに地形を変える。

そんな世界で、孫に囲まれて老衰するなんて死に方ができるのは良いところ天竜人か、よっぽどの豪運を持つ人間だけだろう。

つまり、この世界で文化的な文明人として生きるためには、兎にも角にも腕っ節がないといけない。転生モノの二次創作にありきたりな原作介入をする場合としても、やっぱりある程度の実力は必要だ。

と言うわけで、俺は将来の選択肢を増やすために、まず身体を鍛えることにした。
戦わなければ、生き残れない!!!

◎月？日（一週間後）

初めての日記の最後に『身体を鍛える』と書いてから一週間が経った。

俺は、既に、この世界に転生したことを後悔している。

「へえ、特訓。——シン君もそういうことを言う歳になったんだねえ。じゃ、早速覇気を覚えようか」

と仰る。パ。パ。上による連日連夜の覇気修行。

マジなんなん。

いや、いきなり三歳になったばつかの俺が、元海軍将校（少将）の父に特訓を頼んだのも悪いのかもしれないけど。何？いきなり覇気の習得を目ざすとか頭ルフィか？

と言いながらも、実はこの覇気修行。よくよく考えると実に理に適っている。

まず、俺はさつきも言ったとおり、絶賛成長期の三歳児だ。他の子供より若干知能が発達してる以外はゴミレベルの性能と言っていいだろう。

そんな俺がいきなり筋トレなり、武術の型の練習をしたところで身体を壊すのが関の山。最悪、成長が阻害されて身長が伸びないなんてことにもなりかねない。

だが、覇気の修行はイメージと精神力さえあれば座っていてもできる。

.....それにしたっていきなり見聞色の修行は辛い。

新聞紙を丸めた筒で叩かれるだけだが、毎日何百と殴られ続けているから頭はたんこぶだらけだ。

ぬぐぐ、だがこの世界で生き残るためにも修行を辞めることはできねえ!!やるしか

ねえよなあ!!!

●月?日

「貴方ー、お弁当忘れてるわー」

ビュオンツー!!

「いやあ、ごめんね」

「はい、お弁当。全く、*剽*が使えるからって、出かけるのが遅すぎるんじゃないかって?」

「ごめんごめん。これからはもう少し早めに農地に向かうようにするよ」

「私、貴方がそう言っ守ってくれた記憶が無いわよ」

目を細める母に、母に凶星を突かれ苦笑いする父。

微笑ましい光景だと思う。

息子である俺も、隣で武装色の特訓をしてなきや「微笑ましい」と素直に言えたと思う。

ぐぬぬ、一向に新聞紙で岩が砕けん……いや、俺はできる子。こんくらいやっつてやらあ!!

やっつてやらあ……

——アマゾンリリーの人たちは普通に覇気使えるとかウソだろ。

★月？日（四年後）

七歳になった。

パパ上のスパルタ教育が実を結び、俺は四年という歳月を経て、ようやく二色の覇気が使いこなせるようになった。

……使いこなせるって言っても、武装色と見聞色のオンオフが可能になった程度だけだな。

ただ、これでも一般的な覇気の習得スピードから考えればかなり早いほうで、パパ上は泣いて喜んでいた。

「シン君は本当にすごいねえ。これなら将来は立派な海兵になれるよ」

——う、うくん。それは保証できないかもだけど、とりあえず六式使いにはなりたくないなあ僕。なーんてことを思っていると、パパ上は

「じゃあ、今度は覇気を使った武術——六式を覚えよつか」

と自然に六式習得へ舵を切ってくれた。

そんなわけで、最近はさわり程度に六式をパパ上から学んでいる。

——まさかパパ上が六式使いだったとはなあ……。剃は使ってたから、せいぜい三式使いくらいだと思ってたんだが。

もしかして、今世の俺って滅茶苦茶豪運なのかもしれない。ハッ、これが転生特典って奴か!?

□月?日

あー、痛々しいわ。昨日の俺。精神年齢はとくにアラフォーなのに転生特典とか口走ってワクワクするの、本当に無いわー。

いくら、俺の精神が肉体に引つ張られてるらしいからと言って、あのテンションの上がりようはキモいと言わざるを得ないわー。

あの後、蒲団の中で身もだえしていた記憶早く忘れたい。

社畜やつてるときは、『人は生きてるだけで、他者に迷惑をかけるのだから、なるべく他者に迷惑をかけないように心がけて生きるべき』がモットーだったのになー。

……でも、昨日の俺の暴走もわからないわけでもない。

なにせ、六式使いは原作でもほんの少ししか出てこないレアキャラだ。俺の記憶が正しければ、十人もいなかったと思う。

そんな人が農作業の傍らとはいえ、一日中つきつきりで覇気や六式を教えてくださいなんて、贅沢以外の何物でも無いだろう。特にONE PIECEファンの俺からすれば、垂涎モノだ。

ああ、まあ、主人公が嫌いな作品のことよく覚えてるなって思うかもしれない。

普通に考えたら主人公が嫌いな作品⇨嫌いな作品だしな。俺も基本はそうだし。

ただ、俺の例外って言う粹にONE PIECEという作品は嵌まった。それだけのことだ。

なーんてカッコつけてみたけど、ぶっちゃけONE PIECEって最高だと思う。構成や設定、伏線もイカしてるし、覇気の設定とか控えめに言ってる。

ただなー、やっぱりルフィは嫌いなんだよ。というか、海賊は基本的に嫌いだな。

でも、海軍の人たちは好きだ。特に、アレ。ハンニバル副署長は本当に素晴らしい人だと思う。

ちよつと野心が強すぎるし、結構ゲスな人間ではあるが。

あの人の本質は海賊という存在悪を許してない正義漢であるということだと俺は思っている。

「何を・・・貴様らシヤバで悪名上げただけの・・・海賊に謀反人・・・!!!
何が兄貴を助けるだ!! 社会のゴミが綺麗事抜かすな!!! 貴様らが海へ出て存在するだけで・・・!!! 庶民は愛する者を失う恐怖で夜も眠れない!!!」

マジで痺れる台詞だよな。

嘗ての親の名前すら忘れた俺でも、この台詞だけは今も諳んじることが出来る。それ

だけ、印象深い台詞だし、思い出に残ってるシーンでもある。

——世界政府の上層部は腐ってるけど、ハンニバル副署長に会えるのなら、海軍になるのもいいかもしれんね。

「さて、と。今日はここまでにしてきつきと寝るかあ」

そう言っつて、俺——シンカイは、ペンを置いた。

俺がこうして日記を書き始めたのは、三歳の頃からだった。

「しかし、最初は酷かったよなあ。日記」

思い出すのは、日記を書き始めた当初の記憶。

ONE PIECEを好きな人間なら言うまでも無いが、このONE PIECE世界は、音声言語が日本語なのに、文字が英語だ。口から出る言葉は日本語なのに、名前は英語で書かなきゃならのである。マジクソ。

この環境に適應するのに、俺は膨大な時間を要した。

具体的には四年ほど、フレッシュな幼児の脳味噌でも、根っから染みついた母国語の癖を抜き去るのには、時間がかかった。……うん、かかりすぎだと自分でも思

うけど、これはもう仕方ないと割り切ることにした。だって、実際問題できてねえんだもん。

そのため、練習に使われていた日記（別にONE PIECE文法の練習の為だけじゃないけどな）は、日本語と英語が中途半端に混ざったよくわからない暗号めいたシロモノになっている。まあ、この世界にいる天才連中のことを考えたら、今の日本語英語交じり文は割とありかもしれんと思っっていたりする。・・・・・・なにせ、俺が日記に書いた——正確には書いてしまった内容は、この世界でも極一部の人間しか知らない情報。それを万が一にも解読され、他者に読まれてもした場合。

いいところ暗殺。悪くて拷問。天竜人のペットになる人生がマシと感じられるような、体験をさせられること間違いなさだ。まあ、そんなお偉いさんの目に俺の日記が入ればの話だけだな。

◇月？日（三日後）

・・・・・・久しぶりに日記を開いた。

正直、あと数日の命である俺に、もう日記なんて書く意味はない。だけど、せめて、俺以外の人が俺を守るために戦ってくれた人を思い出せるように、俺の短い第二の人生の締めくくりをここに記録しようと思う。

最後に日記を書いた日の次の日。

俺たちが住んでいるこの島に海賊が現れた。

ウエスト・ブルー
西の海にあるココット島は、元々人口が二〇〇人程度しかいない小さな島だ。

その二〇〇人もほとんどがじいさんばあさんだし、イノシシ以上に大きな獣も出ないから、武器はおろか戦闘技能を真面に扱える人材はごく僅かしかいなかった。

だから、せめて父さんや自警団の皆の邪魔にならないように、俺たちは必死に逃げたけど、ダメだった。

見たことも聞いたことも無い悪魔の実の能力によって、俺以外の間人は瞬く間に塵に分解されてしまった。

俺は、とつさに武装色の覇気で全身を防御したお蔭で助かったけれど、その直後に海

賊の一撃をモロに喰らって、島の中央にある大樹の麓まで吹き飛ばされてしまった。

俺が意識を失う直前、大樹にぶつかった痛みで歪む視界の中に、父さんは写つてなかった。

目を覚ますと、目の前にはポロポロになった父さんがいた。

左腕は肘から先が無く、右の脇腹は大きく抉られていた。

浅く呼吸をしていることから、生きてはいるとわかる。だが、それだけだ。

父さんが歩いて来ただろう道の上には、目を逸らしたくなるほどの血痕が残っていた。

これでは、もう――

「……全く、昔から聡い子……だとは思ってた……けど、受け入れるのが……早すぎ……でしょ」

俺が父親との早すぎる離別を受け入れようとしたその時。

父さんは、擦れた声でゆっくりと言葉を紡いだ。

こういつたとき、俺が未だ持っている――今ではもう、ほとんど思い出すことのできないうつすらとした――前世の記憶では、映画や創作物では「喋るな、傷口が開く」と

か、「まだ、大丈夫きつと助かる」っていう見え透いたウソを口にしていた覚えがある。けれど、俺には、そんな見え透いたウソすら言うことができなかつた。

言つてしまえば、俺と父さんが——俺とココット島の皆が、何年も何年も積み重ねた全ての時間が、ウソになってしまう。

そんな気がした。

「……シンカイ。見ての通り……僕に残された時間は……もう無い。だから、心して聞いてほしい」

「ああ、わかつたよ父さん」

俺は父さんの右手を両手で力強く握つた。

父さんは、力なくそれでもしつかりと俺の手を握り返してくれた。

「……君は、本当に……本当に、不思議な子だつた」

父さんはぼつりぼつりと言葉を紡ぎ出した。

「……他の子供達が興味を持つような玩具や、絵本には目もくれないくらい大人びているのに、嬉々とした顔で修行したいなんて言い出すし」

「……まあ、ONE PIECEファンとして、覇気を習得できると思うとテンション上がったのは事実だけだね。父さん、何も死にかけてる時にそんなこと言わないでもいいじゃない。」

「教えてないような難しい言葉を使うくせに……字が下手で文章も綺麗に書けないし」「あの、いや、それは本当に申し訳ないと思うんだけど、それ今言うことかな父さん!」「あ……そうだね。ふふ……なんてだろうね。最後だって、わかっているのに、口から出るのはいつもの不満ばかりだ」

……親を殴りたいと本気で思ったのは、生まれて初めてだった。

「……どこか大人っぽくて、……あんまり僕たちに甘えてくれない……なんていうか、チグハグな子供だった。まるで、この世界を知ってる別の世界の人の魂を持つているように感じる時もあった。……そんなこと、あるわけ無いのにね」「そう、だな。……俺って、変な子供だったな」

擦れた声で笑う父に釣られて、俺も思わず頬が緩んでしまった。少しだけ、俺の声が震えた気がしたのはきつとそのせいだと思う。

「でも……ね。僕は……僕ら夫婦は君が子供で楽しかった。……君がいてくれた七年間は……本当に、幸せだった。だから、シンカイ。——君は、周りのことなんて気にしなくてもいい。誰かに迷惑をかけてもいい。それを背負う覚悟があるのなら、君は……君が正しいと思う生き方を貫きなさい」

……その言葉を最後に、父さんは息を引き取った。

言いたいことは沢山ある。「俺が転生者ってことになんて気がついたのか」とか、「疑

いながら育ててくれてありがとう」とか、本当に沢山の伝えたい言葉があった。

「ああ、俺は——俺がやりたいことをやるよ。島の皆の命も、全て背負って生きていく」
ただ、どんな言葉よりも早く、俺はそう口にしていた。

「……俺は、ずっと、自分がONE PIECEの世界で生存し続けること」
について悩んでいた。

なにせ、俺のモットーは、『人は生きているだけで、他者に迷惑をかけるのだから、なるべく他者に迷惑をかけないように心がけて生きるべき』だったからな。

そんな、誰かに迷惑をかけた責任を背負えるような強さを、俺は持つてなかった。
でも、今の俺は違う。

背負うための強さは、もう貰った。

やりたいことも、見つかった。

なら、進むしかない。

どんなに苦しくても、悲しくても。俺に進めと言ってくれた人達の為に、俺に歩けと言ってくれた人達のこと、世界から忘れられないようにするために。

「——と、こんな感じで良いか」

俺は、日記の近くに埋もれていたインクとペンを使って、残り少ない日記にこの島で起こった最後の惨劇と、自分の決断について書き終え、筆を置いた。

「これで、とうとうやる事が無くなったか」

父さんや島の皆が死んでから二日が経った。

一日目は遺体をまとめて焼いてから、骨を埋葬した。・・・本当なら、個人個人にお墓を作って埋葬すべきなんだろう。

だけど、俺の母さんも含め、遺体が残っていない人の方が多かつたし、死んだ後も離れられないようにと願いをこめて、一つのお墓に埋葬した。

二日目の今日は、島を出るための準備を始めようと、島の集落からモノを物色しようと思っていた。

だが、その時に、ふと腹の虫が鳴き始めたので。飯にしようとな家の食料庫を開けた。

・・・中身は空だった。

その時、既に俺は嫌な予感がしていた。だが、この嫌な予感を振り切るかのように頭を振って、集落中の家に押し入り食べ物を探した。

結果は全滅。おそらく、あの海賊連中が根こそぎ持って行ったのだろう。食料の他に、酒や金目のものなんかもほとんど残っていないかった。第一、あの分解の能力者のせいで真面目な形で残っていた家の方が少ないくらいだった。

そんなわけで、俺は唯一見つかった日記とペンを使って日記を書き記していたと言うわけだ。

……いやあ、これはダメかもわからんね。

二話 ウミウミの海兵は見入られる

◆月○日

詰んだ。マジで何も食う物が無い。

「いや、小さいとはいえ島なんだからなんか食い物くらいあるだろう」と思うかも知れない。だが、実はこの島は食料のほとんどを外部からの輸入でまかなっている。

少し、昔の話をしよう。

元々、このココット島は昔から有名なお茶の一大産地だった。ただ、かつての島には自給自足をするに足りるだけの農地や森もキッチンとあった。

それが変わったのは、二十年前にとある天竜人がココット島のお茶に味を占め、無茶な発注をしてきてからだ。

ココット島は島そのものの大きさこそ小さいが、ONE PIECE世界の特殊な地理的条件も相まって、一年中お茶を作ることができた。

だから、一年目の注文にはなんとか応えることができた。

しかし、翌年から大幅に注文が増え、その注文に応えるために、ココット島の人々は

少しずつ農地を削り、茶畑を増やしてきた。

用は無茶なプランテーションを強要されてきたのだ。……マジで天竜人つくソ。

しかし、このココット島ではこの二十年の間に、強い反発が一度も起きなかった。

理由は単純で、建材用の人工森林と茶畑以外無くてもこのココット島は、周りの島からの食料輸入でなんとか生活できてしまったのだ。

なにせ、ココット島の周辺は海王類も少なく、海も穏やか、治安も良好。また、世界貴族御用達のお茶の産地であることから、輸入船には海軍の護衛艦が張り付いているため、人災も少なかった。また、そうやって外部の人間が活発にやってくれば、人口も増えやすくなる。事実、俺の父さんも輸入船の護衛でこの島を訪れたのが、母さんと出会ったきっかけだったらしいし。

それに、この島がお茶の島として有名になるにつれて、海賊の襲撃が加速的に減ったのも、反発が無かった理由だ。

まあ、そりやそうだよな。いくら高値で売れるとはいえ、お茶はお茶。量が無ければ、売っても意味が無いし、真水を用意することが難しい海上じゃ自分で消費するのも難しい。

また、海軍が頻繁にやってくる島にわざわざ訪れる海賊もそうはいない。……

一部のキチガイを除き、だけどな。

要するに、だ。この島の平和って言うのは数多くの偶然が幸運にも重なり合った結果というわけであり。

その幸運のツケが、最後の島民である俺に回ってきたと言うわけだ。
ファツ○だぜ。オウ、クレイジー。

「しっかし、本当にもう、限界かも知れない」

仮にも俺は七歳児。成長期だ。基本的に栄養は全て成長へと使われていく。

魚を捕ろうにも、そもそも食える魚が何かわからんし。食える魚だとしても処理の仕方わからねえから魚はNG。

イノシシは俺の六式擬きとよわよわ武装色じゃ仕留めきれないのでこれも？。

「少しはこの世界の植物とかについて勉強しとくんだった……」

俺は後悔のため息を吐き、そのまま砂浜にペタンと座り込む。

正直、俺の状況は詰みに近い。というかほぼ詰みだ。食料の輸送船が来るのは二週間に一度で、来たのは五日前。六式も鉄塊・紙絵・指銃以外は形にすらなっていないため、隣

の島に移動するのも無理。

「……………ここで、悩んでも仕方ないか」

俺は島の中央に聳える大樹を見上げ、空腹を訴える腹を押さえながらその方向へと歩みを進めた。

“ココツトの大樹”

この島の守り神として崇められている木だ。ただ、それでも大きさは五階建てのビルくらいなので、飛び抜けて大きいと言うわけじゃない。

ただ、それでもこの木の上から見る海は、とても綺麗なのだ。

「あー、やっぱり綺麗だなあー」

沈む夕日と凧いだ海。視界の端々に写る島々。

「……………でも、この海には今も海賊とか、天竜人とかに理不尽に襲われて、何もかも奪われる人もいるんだよな」

脳裡に浮かぶのは、嘗ての生で見たONE PIECEの様々なシーン。

ギルド・テゾーロは希望を、

ゼファーは家族を、

ヤマトは憧れを、

ニコ・ロビンは真実を、

「こうしちゃおけねえ、海水で痛みきる前に食うなり、処理するなりしねえと!!」
俺は勢いよく大樹を駆け下り、漂着物がたどり着いた村跡近くの浜辺に急いだ。

「………うつわあ」

俺は、語るの**も**はばかれるような表情で、浜辺に流れ着いた漂流物を見つめていた。
まず、その漂流物は、青いグラデーシヨンの綺麗な果物だった。

「………俺は、この世界の食い物にはあんまり詳しくないけど、これってアレだよなあ」

アレ——そう、ONE PIECEの世界に存在する特殊な色合いの果物。つまり、
悪魔の実である。

パラミシア ゾオン ロギア
超人、動物、自然の三種類が存在し、どれを食べても人間を超える力を得られると言
われる不思議な果物。それが、悪魔の実である。

「——でも、これを食えば俺は助かるかも知れない」

そして、餓死寸前の俺の目の前に現れた最後の希望でもあった。

「もし、この悪魔の実を食べることで、俺が飛行に関する能力を獲得すれば、俺は確実に

助かる。空を飛べなくても、足の速い動物系なら『月歩』を使えるようになるかもしれない」

勝利条件は二つ。ただ、それでも悪魔の実の膨大なバリエーションを考えれば、分の悪い掛け。

「ただ、青いグラデーションの悪魔の実なんて見たこと無いから、ハズレの可能性は正直高い」

さらに、劇中に出てきた悪魔の実の形とはかけ離れた——完全な球体に、透き通る青のグラデーションという出で立ちが、俺を不安にさせた。

「進めば二つ、戻れば一つってな!!——頂きます!!」

だが、食わずに死ぬよりも食って後悔だと決断した俺は、悪魔の実を掴み、実にかぶりついた。

「ウツ!!——」

瞬間、口に広がるのは——天井の調べのような極上の味。

「旨い!?!?なんで!?!?」

悪魔の実は、非常に不味い筈なのに——。そう思考するも、俺はあまりの旨さに（空腹だったのもあって）口を止めることができず、実を残さず完食してしまった。

そして、その瞬間。俺の身体の内側から膨大な力が湧き出てくるのを感じた。

「やった!!成功だ!」

一瞬、あまりの旨さにただのヘンテコな見た目のフルーツかと思ってしまったが、そんなことは無く、俺は無事に悪魔の实の能力者に至った。

「さて、俺は何の实の能力者なのかな——」

俺は湧き上がる力のままに、拳から水を出した。

「——ハイ!?!」

というか、拳が水になつていた。

「つて、オイ。これつてまさか——」

身体が水になつている。

その事実気がついた俺は、右腕を液状にしたまま、その腕で近くにある乾いた石を撫でた。

石は濡れていた。

「(だが、問題はそこじゃない。もし、俺の推測が当たつたら、——俺は本当に世界を変えることができるかもしれない!!)」

液化化してない左腕で石を持ち上げ、濡れた面を恐る恐る舐める。

しよっぱい。

「——ウソだろ、オイ」

俺も、この石が無味だったら自分が考察スレとかで話題のミズミズの実だとか言っ
てはしゃぐことができたと思う。だが、実際問題。俺が舐めた石はしよっぱかった。つ
まり、俺が生み出すものは海水。

海に嫌われるという性質からかけ離れた最強にして最高の悪魔の実。

「ウミウミの実………実在したのか」

どこかの考察系動画配信者が、ONE PIECEは、ルフィのニカに対応して、イ
ムがウミウミの実を使うなんていう与太話をしていたが。まさか、その与太が現実にな
るなんて………。

俺は痛む頭を抑えながら、呆然と浜辺に立ち尽くすのだった。

三話 ウミウミの海兵は能力を知る

▽月〇日

……俺がウミウミの実を食べてから、一週間が経った。

本当にあれから、色々なことがあった。

……本当に色々なことがあった。……マジで、大変だった。

……今思い出しても、思わず涙が出してしまうようなことばかりだ。

——よし、切り替え完了。じゃあ、まずは俺が今どこにいるかから書こう。

前回の日記の終わりでは餓死寸前だった俺だが、実は今、東の海のゴア王国の辺境、フーシヤ村でお世話になっている。

うん、ここだけ切り取ると本当に意味不明すぎて草。

なので、軽くだけでも、俺がこの人外魔境ガープ、ドラゴン、ルフィ、エース、サボなど人間を辞めている者達の出身地ゆえフーシヤ村にたどり着いた経緯について説明し

よう。

まず、ウミウミの実を食べて海洋人間になった俺は、すぐにこのウミウミの実で何ができるのかを調べ始めた。

「よっしゃ、行くぞー!!」

最初に俺は自分が海で泳げるかどうかを確かめようと、気合いを入れながら、恐る恐る海水に足を踏み入れた。といっても、いきなり海水に顔をつけるのは流石に不安だったので、まずは海の中でも力が抜けないかを調べることにした。

「……………意識は無事。力も入るし、覇気も使える。——そして、能力も変わらず、と」

結果は良好、ウミウミの実の能力者は海水に嫌われない。ということがわかった。

まあ、そりやそうだよな。今じゃ俺が海そのものみたいなもんだし。

ついでに言うのと、どうやら今の俺は、身体から海水を生み出すだけでなく、触れている海水も操れるということがわかった。

ヒエヒエ、マグマグ、ピカピカしかり、自然系の能力者は「生み出し、操る」って認識だったけど、どうもウミウミはそれに加えて、周囲の水を支配する能力もあるようだ。

「それに、若干だけど覇気の展開速度も上がってる気がするな。……特に見聞色に関して、海上よりも、海中の方が詳しく見ることが出来るみたいだ」

また、〃海に浸かっている間は能力が若干向上する〃ということもわかった。

俺はこの調査結果に概ね満足し、次の段階。

身体全体を海水に沈めて、泳げるかどうかを確かめようと、息を大きく吸い込み、顔を海水に沈めた時。俺は、本当に一瞬だけ考えてしまったのだ。「このまま、話を通じそうなガープなり、センゴクなり、センゴクの住んでいる場所に行けないかなー」と。

ちなみに、なぜガープとセンゴクを思い浮かべたかと言うと、本当に思いつきだ。

ただ、冷静になって考えると、この人選は最適だったと思う。

まず、俺はこの時、ウミウミを食べた直後で空腹感が若干紛れていたとはいえ、それまでは二日間、一切何にも食べてなかった。

その上、この時の俺は空腹を超えて、これ以上何か食わないで居続けると死ぬかもしれないという恐怖があった。

だから、比較的的安全で、——人間性も優れた人が多いだろう主人公の出身地であるフーシャ村が頭をよぎった。というのがある。

次に、俺が抱えてしまった〃ウミウミの実の厄介さ〃だ。

原作に登場していない悪魔の実とはいえ、能力者に絶対的な有利を取れる上に、人間

が生きる上で必要不可欠な水を無尽蔵に生み出せるという能力の有用性は、金を生み出し操るゴルゴルの実以上だ。

加えて、この悪魔の実にもしかして変な曰わく。原作で言うところのゴムゴムの実のような、厄介な性質などがあつた場合だ。

そうだな、例えば

“ドンキホーテ一族以外はウミウミの実を扱つてはならぬから、お前はすぐ死んで悪魔の実を吐き出すえ”なんて出会い頭に言われたら、一発アウトだ。死ぬか、逃げてお尋ね者になるかだ。

だけど、これは実は案外簡単に回避できる。それは、天竜人に会う前に、人間性の優れた海軍将校に自分を売り込むことだ。

俺は自慢じゃないが、七歳で既に見聞色と武装色の覇気を使うことができる。原作でゼファーが三十四歳で取得した覇気を”だ。

そして、持っている悪魔の実の能力は、水を操るウミウミ。しかも、俺には海兵になりたいという強い意志がある。

真面な感性をしていれば、俺を殺して天竜人にウミウミを食わせるよりも、俺を育て上げて有効利用した方が賢い。そう思わせることができれば、もう俺の勝ちだ。

だから、俺はこういつた頭で物事を考えられそうなセンゴクさんか、とにかくお人好

しで助けてと言ったら助けてくれそうなガープさんの顔が頭をよぎったのだ。

「……ちなみに、これはあくまで俺がこの時、とっさに思い浮かべてしまった理由についての裏付けなので、そんなに俺の頭の回転が早いわけでは無いということを追記しておく。」

——で、その瞬間。俺の意識は暗転。

「——」……!!」

……。

「おい、小僧!!」

「ハッ!!」

俺はガープのいるフーシヤ村にいた。ついでに、俺を起こしてくれたのはガープさんである。

「……」

感動のあまり声が出なかった。

俺、最推しはハンニヤバル副署長とガープさんやねん謎の関西弁。

「おい、大丈夫か小僧」

「あ、ハイ!!大丈夫です!!」

「で、小僧。お前、見かけない顔だが。どっから流れてきた？」

「……あー、えーっとその信じられないかもしれないんですけど」

俺はそう前置きをしてから、転生云々を除く自分の現在の状況について、ガープさんに全ての事情を説明した。

そう、ウソをつくことはなく、全て正直に話した。

まあ、確かに、上手にウソをつくことはできたと思う。

だけど、……この人には、俺が憧れた正義の味方にはせめて、言えないことは言わないまでも、ウソをつくことはしたくなかったんだ。

だから、俺は全てを話した。

俺が住んでいたココット島が滅んで、もうお茶は作れないこと。

父親であるバウナラ・センカイは俺を守って死んだこと。

俺は武装色と見聞色の覇気を使えること。

ウミウミの実の能力者だということ。

そして、将来は海兵になりたいということ。

これを伝えると、ガープさんは満面の笑みを浮かべ、フーシャ村で俺が寝泊まりできるように取り計らってくれた。

「なんで、……までしてくれるんですか」と聞くと、「お前の親父が元部下だったっての

もあるが、ウチの息子と違って将来有望なガキを育てるのにそんな大層な理由はいらん」

「……あー、ドラゴン海兵にならずに革命家になったからなあ。少しは、寂しいかと思うんだろうか。……エースのときに、あれだけのことができる人だから、きっとそうかもしれない。」

本質的にこの人は、面倒見が良いんだろうな。俺が、遠慮がちに飯食つてた時なんて。「——飯代が気になるんなら、お前が海兵になったときにまとめて返してくれりゃあい」

と豪快に笑っていたくらいだ。

とまあ、すったもんだあり、ガープさんに保護されることが決定した俺は、ガープさんの休暇が終わるまでの一週間、ここでウミウミの実の能力について調べることにした。

さしあたっては、俺をこのフーシヤ村まで強制転移させたあの能力について。

——三日後

三日間における検証の結果。俺はこの現象の謎を突き止めた。ちよつと複雑な話なので、心して聞いてほしい。

ええと、まず俺のウミウミの実は海洋人間になることができる悪魔の実だ。そして、海洋人間の海洋っていうのは、海水をニュートラルとした水の塊を指す。まず、これを理解して欲しい。

そして、海洋人間である俺は、いわば水は俺だし、俺は水状態なのであるここら辺でガープさんは寝た。

そこまで考えて、俺はある仮説を立てた。

それは、俺は身体を海に同化させたあと、目的地で再構築することができるとは思わなかった。いかってことだ。

そして、俺はその仮説を実証するために、自分の小指を自分で捻じ切り——本当に痛かった。実験のためとはいえ、自分で自分の小指を捻じ切るとかも二度とやりたくない。でも、この経験のお蔭で痛みで意識が飛んで死ぬってことは、そう無くなつたと思う——、痛みで飛びそうな意識に耐えながら、俺は用意しておいた海水を小指にぶちまけた。

ぶちまけられた海水は、恐ろしい早さで傷口に集まり、俺の小指はまるで何も無かつたかのように、そこに存在していた。

そして、俺が捻じ切った小指を置いておいた食器の上には、俺が捻じ切った小指と同じくらいの体積の水があつた。

この検証の結果。俺は水そのものであり、失った身体は新たに水を供給することで補完することができるということがわかった。

至極簡単に言うると、今の俺は寝ている間に腕とか足とかもがれても、失った分の体積の水に触れれば、傷も一瞬で治るチート体質なのだ。控えめに言ってもヤバイ。

……話を俺の瞬間移動に戻そう。

俺の肉体は、俺の予想通り失った分の体積を全く別の水で補うことができる。

その応用で、俺は瞬間移動ができるらしい。らしいというのは、俺が瞬間移動を試していないからだ。流石に、俺の脳味噌にココット島の正確な位置情報は入っていないからな（原作に登場していない場所だし）。

え？他の場所で試せ？それは無理だ。

いや、瞬間移動自体は成功すると思う。そこには確信めいた自信がある。でも、また、意識を失う可能性もあるわけだし、よしんば無事に行って帰ることができても、俺はガープさんにその場所を知っている理由を説明できん。

閑話休題。

とにかく、俺は“ニュートンのゆりかご”に似た原理で、瞬間移動ができるらしい。“ニュートンのゆりかご”っていうよりも、“テセウスのパラドックス”に近い原理かな？

……何言ってるかわかんねーと思うが、俺もよくわかってない。オタク特有の尖った物理知識じゃ、説明するのが難しすぎるんじゃない。

ま、まあ、とにかく、俺は海に触られて、目的地の場所がわかれば一瞬で移動が可能ってことだけ抑えといてくれればいい。

で、次の問題だ。

なんで、俺が行ったことも無いフーシャ村に来られたかってことだな。

これの答えはかなり単純。

原作知識。以上、閉廷。

さて、話をまとめるとだな。

・身体を欠損するような大けがを負っても、同じ体積の水があればその水で、身体を再構築できる。

・その応用で、海に隣接している場所という条件を満たした場所に限り、大まかな場所さえ知っていれば、軽く念じただけで瞬間移動ができる。

……いや、ウミウミ、チート過ぎん？

ちなみに、この事実をガープさんに報告したところ。

——寝た。もう、物の見事に寝た。

嬉しそうに「おう、じゃあ話してみろ」と言った後に寝た。

ガープさんえ……。

と、まあ。そう言った理由で俺は、このフーシヤ村にやって来たわけである。やっぱり、物理学は全てを救うな。

四話 ウミウミの海兵は戦闘を知る

▽月●日

昨日は俺がガープさんに出会った◆月○日から▽月○日までの四日間について書いた。だから、今日はそれから今日に至るまでの三日間について書こうと思う。

と言っても、昨日については日記を書いてほぼ潰れたので、正確に言うとは昨日までの二日間が正しい。

時系列にすると

◆月○日 俺がウミウミの実を食べ、フーシャ村に転移する。ガープさんと出会い、この日から一週間フーシャ村に滞在することが決まる。

▽月?日 フーシャ村に来て三日が経つ。俺の瞬間移動の原理がおおよそ判明する。

▽月○日 フーシャ村に来て一週間が経つ。フーシャ村についてのから一週間の前半を日記にしたためる。……夕方、フーシャ村を出た。

▽月●日 今日。今は海軍の船の上で、波に揺られながら日記を書いている。フーシャ村に着いてからの後半について日記を書こうとしている。

という感じだ。

ただ、ぶつちやけ後半はある出来事以外を除けば、そんなに大変では無かった。一昨日つまり、フーシヤ村に来てから六日目はお別れ会をしただけだったしな。

「……いや、丸三日能力の研究してたわけじゃないから。村の皆と結構ふれあってたから。」

具体的には、食べられる魚を教えて貰ったりとか、ガープさんと釣りをしたりとか、村の子供達相手に鬼ごっこしたりとかかな。

そんな風に年相応の時間もちゃんと過ごしてたさ。

え？じゃあ、何が大変だったのだったの？

——五日目に遭った誤字では無いある出来事が本当に大変だっただけサ。

いやあ、まさか。

海軍の英雄と手合わせすることになるとは思わなかったなあ

それは五日目の朝のことだった。

「シンカイ、ちよつと俺と手合わせせんか？」

「え、嫌ですけど」

俺はガープさんの地獄のような提案に、恐ろしい早さで拒否を示していた。

「……いや、考えてもみてほしい。俺の目の前で嬉々として模擬戦を要求してくる人は、かの有名な海軍の英雄、モンキー・D・ガープその人である。」

「……模擬戦とはいえ、無事で済む気がしない。」

その上、この人は原作の年老いた状態ですら、自然系能力者である赤犬を殺せると言い放った程の実力者だ。

七十六歳ですらアレなのに、俺の目の前にいるガープさんはおそらく四十代後半。口調も原作よりも若々しく、髪も黒い部分が多い。一人称も俺だし、所謂祖父ちゃん口調でもない。

つまり、現役バリバリなのである。

ガープさんが少しでも手加減をし損なったら、おそらく俺は死んでしまうだろう。そういう嫌な確信がある。

——確かに、俺には肉体が完全に死にきる前であれば、水を供給することで一瞬で全快することができる能力「生々流転」がある。

腕がもがれようが、心臓をオベオベでパクられた後に潰されようが、水さえあれば何度でも蘇ることができるのだ。

死にきる前に水を供給することができれば、の話だけだな。

そう、俺の唯一と言っているいい弱点。それは、一瞬で身体を跡形も無く吹き飛ばされたら死んでしまうところだ。

そう言う意味で言うと、俺にとつて一番戦いたくない相手はボルサリーノさんだったりする。

まあ、ボルサリーノさん相手なら水蒸気を操作して、光を屈折させれば良いんだけど。レーザーによつて水蒸気すら残さず消し飛ばされたら、俺もノーダメージとは言えない。

また、同じ理由でガープさんとも戦いたくは無い。連打でも受けて、身体が再生できないレベルで吹き飛ばされたら流石に俺でも死んでしまう。

「——お前の強さがわかつとれば、俺もお前の海軍入隊を後押しできると思うんだがなあ」

「なにやつてんですかガープさん、さっさと浜辺に行きますよ」

「わかりやすいなあ。お前」

……命には代えられないっすからね。そりゃ。

俺はかの邪知暴虐のガープさんを許すわけにはいかなかった。

俺が海軍に入隊できないと間接的に死ぬことを知り、それを使って俺を脅した彼に一矢報いてやらねばならぬと言う私怨の炎が俺の中で、煌々と燃えていた。

「——沈んでください、ガープさん!!!」

「はい、小僧!!」

俺は、暴力的なまでの覇気を放つガープさんに向かって全力疾走する。……剃はまだ使えないので、ただの七歳児の全力疾走だからかなり遅い。

だが、俺の強みはそこでは無い。

俺の悪魔の実はウミウミの実。

無尽蔵に水を生み出し、操作する。それが、俺の強みだ。

「水天・渦潮」
すいてん・うずしお

周囲に巨大な水の球体を二十ほど作り出し、そこから螺旋状に圧縮した大量の水を放出する。放たれるのは、二十の渦巻く鉄砲水。

「——ほう」

ガープさんが感心したように、息を吐く。……この物量で息を吐く程度か、と
思うと頂の高さに絶望しそうだけ——は!?

「ふん!!」

なんと、ガープさんは俺が放った渦潮を殴りつけ、破裂させた。しかも、タイミングが本当に微妙に違う二十もの高圧水流全てを一撃で、だ。

「馬鹿力過ぎませんか!？」

「ガツハツハツ、鍛え方が違うんだよ。鍛え方が!!」

そう言いながら俺との距離を縮めてくるガープさん。剃も使えるだろうが、俺に合わせてくれたのか、普通に走っているだけだ。ただ、それでも鍛え抜かれた海兵の全力疾走なので、俺の何十倍も速いスピードで距離を詰めてくる。

「——ッなら!!」

しかし、近距離戦を望んでいるのは俺も同じ。

「ハッ——」

俺は全身から超高温の蒸気を噴き出す。目くらまし兼、時間稼ぎだが。正直これどれくら——

「洒落臭いわ!」

拳一発でかき消される高温の蒸気。

——一瞬も持たないとか、やっぱこの人ルフィの祖父ちゃんだわ。だけど、一瞬あれば時間は十分。

かき消された蒸気の中——ではなく、俺はガープさんの頭上でフワフワと浮かんでい
た。

「……………小僧。お前、海水人間じゃなかったのか？」

「そうですよ。俺はウミウミの実を食べた、海洋人間。そして、海は雲でもあり、氷河で
もあり、蒸気でもあります」

不思議そうに俺を見ているガープさんに、俺はそう答える。

「スチームエンジン潮流変化・スチームスタイル蒸気形態。この姿の俺は、——中々、熱いですよ。ガープさん」

「面白れえ」

にやり、と笑ったガープさんは、すぐさま拳を握りこみ、俺に接近する。

「——その速度じゃ、俺に追いつけませんよ」

だが、俺は空気中の水分を一瞬だけ固め、それ蹴ってその反作用で高速移動した。

「『剃』か」

空を切った拳を見て、ガープさんはそう漏らす。

「……………小僧、お前たしか六式は使えないんじゃないか？」

「素の状態ならそうです。ですが、このスチームエンジン潮流変化・スチームスタイル蒸気形態の体重は通常の百分の一
下。地面を十回も蹴らなくても、高速移動と呼べるだけの速力が出せます。それに——」

俺は手の平から蒸気を噴き出す。

「こうやって、蒸気を噴出することで、推力を増加させることもできます」

瞬間、膨れ上がる覇気を察知し、俺は再び剃——蒸気・剃スチーム・ソルを使って距離をとる。

「……くく、まるでアイツと戦ってるみてエだわ。拳一つありやすむ話に、あーだこーだ理屈をつける。本当にお前ら親子はセンゴクに似ているなア!!」

「そりゃ、どーもです。センゴクとやらがどこのどなたかは存じませんが本当は知ってるが、知らないフリをしている。フリをするくらいには余裕が残っている証拠!!」

先ほどまでの攻撃と違って武装色を纏った一撃を避けた俺はお返しとばかりに、蒸気・剃スチーム・ソルを使って蒸気の拳をガープさんにぶつける。

予想通りガープさんは俺の拳を殴りつける。

ガープさんの膂力に釣り合うよう、俺は背中から放出する蒸気の量を増加させる。

今の状態の俺に体重はほぼ無いので、こうでもしないと打撃のダメージはおろか、こうやって拳を付き合わせて拮抗状態を作ることすら難しい。まあ、この一撃は別に、拳でガープさんに一撃入れるための物では無い。

俺の狙いは、俺が纏っている高温の蒸気をガープさんに喰らわせることだ。そりゃ、人間の目で捉えられない様な速度でぶつかつたら、蒸気のようにほとんど質量の無いものは、作用反作用の法則で進行方向に飛んでいく。

流石のガーブさんも、これを喰らえば火傷くらいはするだろう。

「オラア！」

と思っていた俺が愚かでした。まさか、裏拳で蒸気を全て吹き飛ばすとは思っていませんでした。……石仮面を被った経験がおりではないでしょうか？

「——ヤバい蒸気・剃!!」

「遅いわ!!」

左手の裏拳の後に来る正拳突きを避けようと後ろに蒸気・剃を発動する俺だが、それを予期していたガーブさんに剃を使われ、距離を詰められノーガードで正拳突きを喰らう。

「あ、加減間違えた。すまん」

「——つハ、ウソだろ」

加減を間違えたとはいえ、手を抜いた一撃で人間が衝撃の吸収されやすい砂浜で何度もバウンドするとか、絶対に人間の腕力じゃない。

……幸いなことにガーブさんから百メートルほど距離を取ることができた。その上、この蒸気形態は衝撃が身体から逃げやすいので、まだ戦うことはできる。

ただ、正直な話をするともうやめたい。でも、この人は俺が気絶するか、底を完全に見せるかしないと模擬戦止めそうに無い。

それに、まだ俺は立っている。

「俺の正義は、まだ沈んじやないってとこ、見せてやりますよ。白天・縛鎖!!」

ボソリと呟いた後、俺は体中に纏う蒸気の密度を高め、ガープさんに向けて放つ。ただし、高温とはいえ、蒸気は蒸気。物理ダメージはほとんど狙えない。だけど、それがいい。

「潮流変化・凍結形態。からの、氷天・縛鎖!!」

狙いは俺とガープさんの間の空間に水蒸気をばら撒くこと。

ばら撒いた水蒸気も水。つまり、俺の支配下にある。そして、蒸気を扱えるのなら逆も然り。

俺は氷も扱える。と言っても冷気を扱えるわけではないから、俺の扱える低温なんてヒエヒエと比べたら拙いものでしか無い。

しかし、それでも氷だ。分子運動を停止させるなんてことはまだできないが、水蒸気を集めて水にし、凍らせることくらいは今の俺でもできる。白い蒸気の鎖は、澄んだ水の鎖へと変化し、ガープさんに纏わりつく。

だが、俺の予想通り氷の鎖はガープさんに蹴られ殴られ、触れる前に砕かれていく。

「まだまだ、氷天・樹海!!」

猛スピードで近づいてくるガープさんに対し、俺は地面から氷の樹を生やして対抗する。

「俺を侮るなよ小僧!!この程度の氷、俺に壊せないワケがないだろうが!」

「知ってます。貴方がこの程度の気泡が入った脆い氷程度壊せないわけがない。でも、俺にはあえて透明じゃない白い氷を作る必要があつたんだ」

「ふん!!」

ガープさんが俺の目の前にあつた最後の氷の樹を砕き、俺に向かって拳を振り上げる。

「おらア!!」

鋼鉄と鋼鉄がぶつかったような甲高い音が浜辺に響く。

俺は覇気を纏った両腕を使いクロスアームブロックでガープさんの拳を受け止めた。ただ、それだけじゃ俺のこの小さな身体じゃ耐えきれない。

「.....なるほど、コイツは囷か」

だから、さっきの氷天・樹海ひよつてん・じゆかいで足の裏から地中に広げていた氷の根に本体を移し、地中から抜け殻の肉体に覇気を送っていたのだ。流体に覇気を流すのは無理でも、こうやって固体に覇気を流すことができるゾロら剣士が武装色で武器を黒化するのと原理は同じのは、原作でも確認済み。

そして、その囷の肉体を介して、氷や水蒸気の間を突っ切ってきて、湿っているガーブさんを凍らせるのは俺にはたやすい。

「つと、あぶねえ」

と思っていたが、ガーブさんは凍りつつあった右手を力尽くで引き抜いた。

当然のように、その余波で俺の元肉体は碎けた。マジかよ（絶句）。

……このまま地中にいても埒があかないので、俺はガーブさんが碎いた氷の樹から身体を再構築させた。

「お、出てきおった」

ガーブさんはなんともないように、笑っている。

「……さっきのアレ、結構冷たい自信があつたんですけど」

「なあに、火照つた身体にやちようどいいくらいだ。しかし、こうやって出てきたつてことは、そろそろお前の手品も品切れか？」

そう思うのなら、腕をグルグルと回すのを止めてほしい。

「いやいや、まだ最後の手品が残ってます。最後まで楽しんでください」

ただ、こちらも最後のとっておきがある。

「ストリームチェンジ 潮流変化・ストリームスタイル 天候形態——ちよつと荒々しく行きますよ」

俺は両腕からバチバチと電気を放電しながらそう言った。

ストリームチェンジ ストリームスタイル スチームスタイル フリーススタイル
潮流変化・天候形態。蒸気形態、凍結形態に続く第三形態にして、今の俺の最後の切り札。それがこの天候形態である。能力は名前の通り、天候を再現することだ。

「(といっても、自分の内側に常時見聞色を使わないといけないこの形態は長くは続かない!!この一撃で終わらせる!!)」

「行くぜ、ガープさん!!これが俺の今の最高潮!!空天・野分イイイイ!!」

瞬間、全身から放たれる雷、雹、鎌鼬。空天・野分は、その名の通り俺を中心として擬似的に台風を再現する範囲技だ。俺から放たれた水と蒸気を操作することで気流を生み出し、気流に揉まれた雹が真空の刃と静電気を生み出す。いくらガープさんとはいえ、雹はともかく、鎌鼬鎌鼬現象は、空気中に真空ができ皮膚が触れると、体内気圧と外気圧のバランスを保とうとするために発症するので、当たればダメージが発生すると雷はその性質上、人間なら多少のダメージは受けるはず。

徐々に大きくなっていく台風がガープさんを飲み込まんと膨れ上がる。あと数秒もすれば、ガープさんは空天・野分の有効範囲に入る。

俺が勝つということはまあ無理だろうが。せめて、一撃は入れられる。この時の俺は少なくともそう思っていた。

しかし、海軍の英雄は俺の想像の斜め上を飛び越えた。

「せえい!!」

「——ハアツッ?!?!」

あ……ありのまま、今、起こったことを話すぜ！拳圧で俺が全力で作っていた気流が停止した。何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのか、わからなかった。

……というのは流石に冗談。原理は簡単。おそらくガープさんは、くうてんのわき空天・野分の範囲外から、俺のすぐ横に俺への直接攻撃に使わなかった威力の打撃を打ち込むことで、気流を生み出していた水の運動エネルギーを霧散させ、くうてんのわき空天・野分の回転を停止させたのだろう。要するに、拳一つで小さいとは言え台風を逆回転させたんだ。

本当に人間かこの人。

「——なんて言ってる場合か!?クソツ、このままじゃやられちばう」

必死に思考を回すが、既にガープさんの拳はあと数フレームもすれば俺の腹部にめり込む距離にあった。

「(仕方ない、ここはツ——)」

「……ほお、これも囷か」

ガープさんは振り抜いた拳の感触の軽さに、俺が再び身体を囷にして逃げたのだと推測したようだった。事実、それは正解だ。俺は今、さっきまでの俺の肉体があった場所のすぐ下の地中に液化化して逃れていた。

ここが砂浜なのも幸いだった。もし、ここが岩盤の上とかだったら、いくら俺でも地中に潜り込むことはできない。

「(ただ、身体に不純物が多く入ってるのは気分が悪いし。このままここにいても徒に時間が過ぎるだけ。何か、逆転の一手を考えねえと・・・)」

能力者で無いガープさんが、地中の俺を攻撃することはできないと無意識のうちに考えていた俺は、先ほどまで張り詰めていた意識を緩め、再度ガープさんに向かうためのプランを練り始めた。

「——実を食って数日でのこの応用力。流石はアイツの息子つてところか。ただ、そろそろ俺も飽きてきたんでな。これで終わらせてもらおうぞ」

だから、俺はガープさんが俺の真上でそんなことを言ってるのに、全く気がつかなかったんだ。

「——オッラア!!!」

次の瞬間。俺は空中に身を投げ出されていた。

・・・突然だが、皆さんはダイラタンシー現象という現象を御存じだろうか。

この現象は簡単に言うと、水の中にある粒が素早い力を与えると、衝撃で粒同士が並んで、粒と粒の間に隙間ができて、その隙間から力が加わっていない部分に水が逃げて

いくという現象である。この現象は主に水に混ぜた片栗粉とかで起こる現象なんだが、泥とかでも起こすことができる。

つまり、俺はガープさんの一撃で、周囲の砂ごと巻き上げられた挙げ句、ダイラタンシー現象の応用で砂と水に分離させられたってわけ。もう、馬鹿力すぎて意味不明だよコンチクショウ。

その上、先ほどまで泥水状態だった俺は、蒸気を噴出できるほどの熱さも、氷を纏って防御力を向上させられるほどの冷たさも持ってない。

「——がッ!？」

——せめてもの抵抗に腹部をありったけの武装色で覆うも、俺はガープさんの一撃を腹部に受け気絶した。

これがフーシャ村滞在五日目の俺に起きた全てである。
ほんともうね。しんどかったわ。

一番しんどかったのは、昼前に模擬戦を始めて目が覚めたのが翌日の朝だったことかな。……最後の一撃、手加減すんの忘れてただろあのオツサン。よしんばして

たとしても、七歳児にぶつける拳じゃ無いんだよなあ。マジ頭ルフィ。

あと、フーシャ村の人たちが本当に優しくしてビックリした。

……本当、心の中で人外魔境と呼んでいてごめんなさい。異常なのはフーシャ村じゃなくて、モンキーの血でした。

日記を書き終えた俺は、ペンを置き、船室の窓から夜空を見上げる。

海軍中將であるガープさんの戦艦は、英雄の船だけあって非常に大きく、俺のような余所者に個人で船室を使わせても部屋に余裕があるほどだ。

「おい、小僧！そろそろ飯だぞ!!」

「あ、はい！」

ドアの前からガープさんの声がする。俺は日記とペンをフーシャ村で貰った鞆に突っ込み、いそいそと船室を出るのだった。

第一章く完く

幕間の一コマ

幕間の一コマまとめ＋現在の設定

第一章 「転生者が平和を愛すまで」

主人公設定

バウナラ・シンカイ

出身地 西の海 ココット島

外見 モンストのハレルヤ（七歳現在※十一月二日加筆）。青い髪に青い目をしてい
る少年。ONE PIECEにはいない目の大きいイケメン。身長は130センチほ
ど。まだまだ小さいが、これから成長期。

性格 平和を愛し、正義を是とするお人好し。また、転生者ゆえに様々なアニメやそ
れに関する知識が豊富。特にジョジョが好き。

ちなみに、今が原作のいつなのかは把握してないが、四〇歳くらいの若いガープさん
に出会ったので、ドラゴンは生まれているだろうと思っっている。

ウミウミの実

主人公が食した自然系の悪魔の実。

見た目は完全な球体で、ヘタや蔓などもない。表皮は透明感を感じさせる青のグラデーションで、様々な海の色が反映されている。

悪魔の実なのに非常に美味。味は、梨に似ているとか。

水を生み出し、操作するだけでなく、周囲にある水分も操作できる。また、水の三態も操作可能。それを応用し、主人公は三種類の形態を開発した。

スチームスタイル
蒸気形態

身体を高温の蒸気で構築した形態。その高温から全身から白い蒸気を放出しており、ただ触れるだけでも火傷をする。また、蒸気そのものであるため、体重が非常に軽く、物理攻撃の衝撃が逃げやすく、ダメージを受けにくい。

フリーズスタイル
凍結形態

身体を極低温の水で構築した形態。両手足は水で覆われている上に、常に周囲の水分を凍結させており、ダイヤモンドダストを常に纏っている。ただし、ヒエヒエと異なり、自分の支配下にある水を介して凍らせるという手順が入るため、凍結スピードや温度はヒエヒエに劣る。

イメージとしては、ウミウミでの凍結が不正なハッキングだとするなら、ヒエヒエは

管理者権限によるコントロールのようなもの。

ただし、支配下にある水はウミウミのコントロール化なので、ヒエヒエに凍結させられたとしても、能力者にコントロールを奪われることはない。・・・ので、クザンとの相性はかなりよく、クザンがシンカイと戦うには覇気を使った肉弾戦しかない。

また、ダイヤモンドダストを常に纏っていることから、ピカピカのレーザー攻撃も放射させることが可能。

氷による遠隔攻撃と防御を得意としている。

ストームスタイル
天候形態

身体を積乱雲のような雲にした状態。両腕からは雷がバチバチと放電されている。また、原作主人公のギア5のように羽衣を纏っている。この羽衣の内部では発電の為に小さな氷の粒が精製されぶつかり合っている。小さな水の粒子を操り、気流を生み出すという戦闘スタイルの都合上、常時見聞色の覇気を使わないと形態の維持ができないので、短期決戦戦用。

ちなみに、発電はできるが雷を操ることはできないので、基本は纏って殴るか、放電するかしかできない。

※すべての形態に共通するところだが、あくまでウミウミは水を操る能力なので、氷や蒸気を直に生み出すということとはできない。そのため、どの形態も身体の一割は完全

に水な部分がある。……というか、そうじゃないと凍結形態は真面に動けない。という設定。

形態を変化させることを潮流変化ストリームチェンジと呼称している。痛い。七歳の肉体に精神が引つ張られているゆえに仕方が無い。

初回（第三話あとがき）

「どうも、主人公のバウナラ・シンカイです。七歳です。夢は海兵、今は臨時で作者のメッセンジャーをやっています（メタ時空ってことだねわかります）」

『説明早よ』

「あ、すいません。カンペが出たんで進めますね。ええと、この「幕間の一コマ」は、特に詳しい説明とかを後書きでする必要ないとき、俺ことシンカイが、作者に代わって皆さんにこの「ウミウミの海兵」にまつわるお話をするコーナーとなっております」

『感想について』

「で、今回はまだ最初の方なので、本編に関して何も言うことはないんですが、作者の感想におけるスタンスについて説明しておきます。ええと、基本的に作者は感想について

はノータッチです。みなさんと感想欄で楽しく談笑などをすることは…おそらく永遠に無いですね。これはなぜかと言うと、作者のマイページにも書いてある通り、ネタバレ防止のためです。……実は作者、こことは別のサイトで小説を投稿していた経験があり、読者様とコメントで会話するときに、調子に乗ってこれから先の内容を全てコメント欄で暴露しちゃったんですよ。ほんと、バカだよなあ……。ま、そんなわけなので、みなさんからの感想は楽しく読ませていただきますが、基本的には作者が直接みなさまとお話することは無い予定です」

『忘れてることある』

「ああーそうだった。そう、だからこのこのコーナーなんですよ!! こうやって作者の代わりに俺が一部の感想に対するコメントを載せる時があるので、たまには後書きもチラ見してください」

『例』

「…え、あー、あの感想ね。「ヒロインは考えてますか」ね。そうねー。俺も恋愛はしたいです（食い気味）し、作者も一応候補を数人挙げているみたいですね。ただ、確定で一人とくつつく予定らしいです。うっわ楽しみ!! 美人でポイントといいなあ!!」

『時間』

「おっと、じゃあこれで本日の「幕間の一コマ」は終了させていただきます。今後とも感

想・高評価共によりしくお願いいたします」

『高評価に対しての感謝』

「え、それ終わりの間際に言う!?!高評価してください皆さんありがとうございますー」

く本日の収録は終了しましたく

第一章 ウミウミの海兵は正義を成す

一話 ウミウミの海兵は対面する

□月○日

俺がフーシャ村を立つてから一週間が経ち、俺はどうとう海軍本部があるマリ
ンフォードの地に足を踏み入れた。

そう、一週間だ。

前世の感覚が抜けてない俺からすれば、一週間という時間は、旅にしてはかなり時間
がかかったように思える。

しかし、原動力が何も無い帆船でフーシャ村がある東の海からマリ
ンフォードの距離を移動したと考えると、一週間という時間はかなり短く済んだほうなんだとか。

……実は、こっそり能力を使って、周りの海水を操って船の速度を上げてい
たのは内緒だ。水の操作能力も向上した上に、早く目的地に着いたから俺としてはこの
船旅は予想以上に良い経験だった。

今では見聞色を使わずに、感覚的に水の粒子を捉えることができるし。水の粒子を媒

介に、今までの倍以上に空気中の水分を操ることができるようになった。

まあ、依然として、天候形態ストームスタイルを使う際には、自分の内側に見聞色を使わないといけないのには変わらない。だが、これでも水を操作する力はだいぶ向上した………筈だ。

自分でも煮え切らない答えだというのは理解している。……けどなー、ぶっちゃけ、まだ実際に水に触って操る方が圧倒的に楽だし、そもそも空気中のモノではなくて、自分で放出した水を操る方が簡単なのは変わらないままなんだよ。

それでも、微々たる変化とはいえ、俺の戦闘能力は確実に向上している。これは、俺が海軍大将になる日も近いかもしれない。

ただ、それもこれも全て、今日これから行われる海軍元帥との面談の結果次第なんだが。

急展開過ぎて草。しかも、ガープさん曰わく、面談が上手くいかなかった場合。俺は即刻処刑or投獄なんだそう。俺って特級呪物食ったっけ？……似たようなモノは食った覚えあるから、自分で言っていて自分で否定しづらくて草。

あと、地味に絶望してるのが、俺の弁護士が成歩堂じゃなくて、モンキーさんなことだ。

筋肉と覇気でトラブルが解決できたら、「異議あり!!」なんて言わなくていいんだよ

なあ………。

ただ、そんな俺の不安を余所に、俺の顧問弁護士（仮）は、今日の面談が上手くいくことを疑ってないらしく、昨日は船に乗ってる海兵さん達と一緒に、「第一回 シンカイ海兵入隊おめでとうパーティー」をしていた。

「マジでいい加減にしろよ」と思ったところもあるが、こうやってガープさんや一週間の船旅で仲良くなった海平さん達と一緒に騒ぐことで、幾分か緊張が緩和されたので、まあ良しとしている。

ガープさんって子育ては壊滅的に下手くそだけど、行動原理だけは何一つ間違っていないから嫌いになれないんだよなあ………。

ガープさんに連れられ、海軍本部にやって来た俺は、そのままガープさんの案内で海軍のトップ。

元帥がいる海軍本部・元帥執務室に連れてこられた。

「コングさん、今戻りましたアー」

ガープさんはノックもせず乱雑に執務室の扉を開き、ズカズカと俺の手を引いて執

務室に入った。

「ガープ!! お前、ノックくらいはせんか!!」

「別に、見られてやましいことなんてせんでしようが。それに、今日はそんな書類仕事なんかよりも重要なモノを連れてきました」

ガープさんに顎で前に行くように促された俺は、黙ってガープさんの前に立った。

「——ああ、お前がそうか。存在の噂すら無かったウミウミの実の能力者か」

コングさんは俺をジツと見つめる。

「ああ! それに、それだけじゃねエ。覇気も使える上に、六式もほとんど習得済みの逸材だ」

「それは知っている。お前の報告を受けたのはワシだぞ、ガープ。だが、そうか……」
ガープさんは満面の笑みで俺をアピールするが、コングさんの心象は微妙な様で、コングさんは頷いたまま、少し考え込んでしまった。

「コングさん。何を悩む必要があるつてんです。コイツは使える。それに、コイツ自身も海兵になるのを望んでいる。——あのクス共に渡す必要なんてどこにもねえはずだ」
「……そうは言うがな、ガープ」

悩むコングさんにガープさんは容赦なく俺を推す。だが、それでもコングさんは首を縦には振らなかつた。

「——ガープ。……ワシに少しこの子と二人きりで話をさせてくれ」

数秒ほど黙りきっていたコングさんは、真剣なまなざしでゆっくりとそう告げた。

「わかった。——小僧、また迎えに来る」

ガープさんはコングさんのその瞳を見て、何かを感じ取ったのか、俺の手を離し、そのまま執務室を出て行った。

元帥執務室には俺とコングさんが残された。

「……ワシは、ガープ程では無いが、言葉を飾るのは苦手だな。だから、率直に言わせてもらう」

数秒ほど逡巡した後、コングさんは子供の俺にも聞き取りやすいように、ゆっくりと口を開いた。

「バウナラ・シンカイ。お前の処刑が決定した」

正直、心臓が止まったかと思った。そりゃ、想像していたことではあつたさ。でも、ここまでハッキリ言われるとは思ってなかったし。

……それだけ前の世界では人の死が遠かった。

「あ、はい」

ただ、不思議と感情が荒ぶったりすることはなかった。むしろ、その決定を自然のこととして受け止められた。

「驚かないのだな」

「——いや、驚いてはいますよ。むしろ、現実味がなさ過ぎて実感が無いだけかもしれない」

俺は頬を緩めながら、それでいて淡々と答えた。

「……死ぬのは、怖くないのか」

コングさんは苦虫を潰したような表情でそう告げた。

「怖くないかと言われればウソになります。……それに、俺が死んでしまえば、ココット島の最後を本当の意味で覚えている人間はいなくなってしまうしね」

「なら、抗えばいいだろう。お前のその能力を使えば、ここから逃げることは簡単なはずだ。……別に海兵にならずに一生逃げ続けることだってできるだろう」

実際、コングさんの言うとおり、海軍元帥が目の前にいるこの状況でも、逃げに徹すれば俺はここから脱出することはできるだろう。生きることだってそうだ。水というありふれた存在に変化することのできる俺は、簡単に生存し続けられるだろう。

「確かに、生きるだけならどうとでもなります。でも、それじゃあ、俺は本当に生きるだけの屍だ。それだけは許容できません」

でも、何も成すことができないのは、死よりも無意味だと俺は思う。

どの世界でも、人の死は重く、かけがえのないものだ。

だから、世の海賊達はロジャヤーの最後の言葉に動かされたわけだし、エースの最後の一言に前の世界の人々は涙した。

父さんは、俺に世界を変える覚悟を遺した。

「……無意味に生きるよりも、意味のある死を選ぶ、か。——だが、お前は誰に託す。もう、お前の意思を背負う人間などいないだろう」

「いるじゃないですか。俺の覚悟を受けとって生きてくれそうな人が」

コングさんの問いかけに、俺は毅然とした態度で答えた。

「——ガープか」

ハツとしたようにコングさんは声を出し、俺は頷く。

「ガープさんだけじゃないです。ガープさんの部下の海兵の皆さんも、フーシャ村の人々もきつと俺の死を覚えてくれる。そういう人たちが暮らす世界で、そういう人を守るために海軍がいる」

ウミウミの実を食べた時。——この世界に生まれたと実感した時、俺はこの世界を守らなきゃいけないという使命感を持った。でも、それは違った。

この世界には、ガープさんがいる。センゴクさんがいる。今は生まれていないがコビーもいる。

平和を愛し、平和を守ろうとする人たちがいる。

「この世界は決して、俺が守らなきゃいけない弱い世界なんかじゃない。だから、いつか俺の理想とする善意が悪意に脅かされることの無い凧いだ世界——凧いだ正義を実現する。そんな人が現れると俺は信じてるんです」

まあ、俺がいない世界でそれを実現するのが、ルフィだと思おうと癪だな。

「……本当にお前は聡い子だ。まるで、センを見ているようだ」

「まあ、父さんの息子ですから」

俺がそう言うと、コングさんは優しい目をして頷いた。

「——そうか。なら、その世界はお前が作れ」

「……はい？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

『その世界はお前が作れ』？俺はこれから死ぬのに、どうやって凧いだ世界を作るって言うんだ。

「第一、海軍志望の強力な自然系ロギアの能力者を殺すのは、そもそもワシも反対だったんだ」
コングさんはゴソゴソと執務机の中から二枚の紙を出し、一枚を破り捨て、残りの一枚にサインを書いて俺に手渡した。

「これは、お前という特記戦力を特例で海軍へ徴兵するための書類だ。書類上、お前は秘匿死刑を免除される代わりに海兵として働くということになる」

コングさんはサインを記した紙を俺に差し出した。

「ガープがお前の存在を俺に報告した時、上に先んじて用意していたものだ。これではらくは時間が稼げるだろう。後はお前次第だ。シンカイ——十年で、お前の有用性を示してみろ」

コングさんはニヤリと口角を上げて笑った。

「——楽勝です。俺はウミウミの実を食べた海兵ですから」

二話 ウミウミの海兵は修行に勤しむ十α

□月△日

先日、コングさんの手回しで海兵になることが決まった俺は、とある有力な新兵と一緒に今年から教官になった元海軍大将の元で修行することが決まった。

なんでも、二人とも俺と同じ自然系ロギアの能力者なんだとか。

……おい、これもう確定だろ。同期で元海軍大将に教えを受けた二人の自然系ロギアの能力者とか、俺二人しか知らねえよ。

□月▽日

きようはじごくだった。

つかれたので、ねむる。

以下、同じような内容の日記が続く

三月〇日（原作開始三十一年前）

俺が海兵になり、半年が経った。その間に、十月一日の誕生日を迎え、俺もようやく七歳から八歳になった。身長はこの半年で10cmも伸びたから、今は140cmくらいだ。

さて、今日は久しぶりにまとまった休みが貰えたので、俺が海兵になってからの日々について詳しく書こうと思う。

……まず、□月△日に書いた二人の自然系ロギアの能力者は俺の予想通り、赤犬と黄猿だった。

そして、俺を指導してくれるという元海軍大将も予想通り黒腕のゼファーだった。

いや、豪華スギイ!!!そして、修行辛スギイ!!!

具体的には、三歳から覇気の修行をしている俺でも、根を上げてしまうレベル。あのサカズキさんとボルサリーノさんの目が終止死んでいるレベルと言うと、俺が受けている修行の凄惨さがわかりやすいと思う。

……ただ、これでも俺の修行内容は、成人二人に比べればまだマシなほうだ。

俺はまだ七歳なので、一日の大半は座学座学の特訓を経て字も上手くなった。具体的には日記の月の部分もなんて書いてあるか自分で読み返せるくらいにだし、夜の九時には眠らされる。だが、あの二人は俺が座学をしている間も、寝ているときも訓練を続けている。

しかも、彼等が海兵になったのは春の頭だから、単純計算で六ヶ月ほど俺よりも多く修行をしていることになる。

ヤバいな。海軍。

追記

今が原作の何年前かようやくわかった（わかったのはだいぶ前だったけど、日記を書く暇が無かった）。

俺が生まれたのが原作開始四十年前で、今が三十一年前だ。

いや、昔スギイ

!!!!!!

四月☆日

俺たちゼファー教室1期生が、訓練を重ねて二年がたった。

俺は十歳になり、サカズキさんからは「シンカイ」、ボルサリーノさんからは「シンカイ君」と呼ばれるくらいには仲良くなった。

身長もグングンと伸び、今では160cmを超えて、170cmに迫る勢いだ。

サカズキさん、ボルサリーノさん、そしてゼファー先生との地獄のような訓練を重ね、

俺は遙かに強くなった。

今では、立派に六式使いだし、覇気の熟練度も大幅に向上した。

それに、最近は一ノさんの部下として、海賊退治の任務もこなしているため実戦経

験も増えてきた。なお、俺の所属については色々物議を醸したらしい。だが、結局は「コイツがいると船を壊さなくてすみます」というガーブさんの脅しのような一言で、俺の配属は決まった。

……砲弾を水のバリアで守りつつ、相手の船の竜骨を砕く作業を実戦というのなら、だがな。ただ、それでもガーブさんらとの実戦さながらの訓練は続けているので、戦闘能力は飛躍的に向上したと思っっている。

ただ、勿論この二年間で嫌なことも沢山あった。

人を殺したこともあるし、仲間を失ったこともなんどもある。……ゼファー先生に俺のお気に入りスチームスタイルの天候形態が雑魚狩り特化と言われたのもかなり傷ついた。

だが、良いこともあった。

ゼファー教室に新しい仲間が増えたのだ。

名前は、クザン。ヒエヒエの実の能力者。掲げる正義は燃え上がる正義だとか。

うん、青雫だね。

……こんな連中が同期（正確に言うとはほぼ同期）な中、世界政府が納得するだけの結果出さないといけないとかいじめとしか思えない件について。

おーし、命が惜しいからコングさんに言っつて、仕事貰ってくるぞ（〇へ顔）。

幕間：クザンの独白

俺はクザン。

今年、海兵になった新兵だが。ロギア自然系の悪魔の実を食ってるおかげで、一応期待の新人ってことにはなってる。

でも、今の海軍には俺以上にヤバい奴もいるのよ。

二期上のサカズキさんやボルサリーノさんもすげエけど、俺が一番すげエと思ってるのは、バウナラ・シンカイのことだ。

天才ともてはやされても傲ること無く努力し続ける姿勢は、俺も見習うべきところだ
と思う。

恥ずかしい話だが、ちよつと前の俺は正直「氷結人間の俺なら海洋人間なんて凍らせりや楽勝」だと思ってたわけよ。でも、実際にアイツと模擬戦をしてアイツの強さは、文字通り次元を超えてるってことを知らされた。

同じ自然系ロギア能力なのに、そこまで差が出るのかって？

ま、確かに俺もアイツも自然系能力ではあるんだが、ちとアイツは事情が違う。

アイツの持つ能力はウミウミ。文字通り一人で海を生み出し、水を支配することができる人間だ。

事実、空気中の水分に冷気で干渉し凍らせて操る俺と、空気中の水分を直接冷やし凍らせるアイツの相性は最悪。お互いがお互いの能力に干渉し合う上に、ウミウミの物量相手じやいくら凍らせても終わりが無く。結局、俺は八つ下のアイツに手も足も出ずに負けちゃった。

ホント、年上として情けねえと思う。

でも、アイツは完敗した俺に、ただ手を差し伸べて「またやりましょう。そして、一人でも多くの海賊を倒せるようになりましょう」って言ったんだ。

全く熱い奴だよ。……俺がアイツくらいのがきの頃は良く悪さしたもんだが、すつかりアイツは十歳で海軍将校をやってやがる。

俺も負けてらんないよね。せめて、階級は年下の先輩に追いつけるようガンバンなきやでしよなお、他の二人も同じように年下の同期に負けないうちに奮起しているため、シンカイ自分で墓穴を掘削していることになる。

三話 ウミウミの海兵は相まみえる

八月〇日（原作二十七年前）

ふと、思い出したので久しぶりに日記を開いた。『日記なのに頻繁に書けないとはこれいかに』って感じだが、俺の抱える事情が事情転生者であるということなので、あんがいこれくらい頻度が良いのかなと思う今日この頃である。情報を残すのが日記の本懐だろうけど、俺の場合は残しすぎると命が危ないからね。しょうがないね。

それに、クザンさんが海軍に入ってから三年は本当に忙しく、日記を書く時間もあまり無かったんだ。

正しく言うと、俺の身長が二m台に入ってから一年と一ヶ月は本当に地獄だった。

……ゼファー先生の指導が成人向けに変わってしまったんだ。今まで寝ていた時間や座学の時間だった時間が全て基礎訓練や戦闘訓練に置き換わり、とにかく覇気を高めるための訓練を続けていた。

ちなみに、原作に頻繁に絡む知り合いはガープさん、センゴクさん、コングさん、おつるさん、クザンさん、ボルサリーノさん、サカズキさんくらいだ。

同世代の同僚？いるわけねえだろ。いや、忘れてると思うが今俺十三歳なんだよ。

つまり、今は原作の二十七年前なワケ。

比較対象として、俺と年齢の近い何らかのバタフライエフェクトが起こらずに、そのまま彼等が生まれていればスモーカーとヒナがいるが、まだ彼等でさえ七歳と五歳だ。

あの二人が七歳と五歳なのに中佐とか出世しすぎて笑える。

……いや、真面目な話をするとう十七歳までに上が認める結果を作らないといけない以上、出世するのは喜ばしいことなだけどさ。流石に五年で中佐なお、二年で大佐になったコビーがいるため、二十七年後には抜かされる記録である。はヤバいと思うワケよ。……これでも生意気な若者扱いされないように、周りに気を配ってるんだぞ？元陰キヤ転生前の記憶は殆ど無いので、事実かどうかは不明の俺がさあ……スゴくね？

まあ、そんな努力の甲斐もあって、艦長として部隊を率いて海賊を逮捕しに行く機会も増えてきた。俺専用の船ってのはまだ貰えないけど、順調に出世街道は歩めていると思う。

……三年前にクザンさんが入隊したときは、俺が昇進するための仕事を全部あの三人に奪われるくなんて考えてたけど。なんだかんだ俺の能力は使い勝手がいいので、それなりに検挙数も稼ぐことができているというわけだ。——やっぱり、船は直接後ろから押すに限る。

さて、俺の命が保証されるまでどれだけの手柄が必要かわからないケド。今日も〝くだ正義〟を実行するとしますか。

「シンカイ中佐ツ!!海軍本部から連絡がきております!!」

夕日が沈みかけ、今日の業務ももう無いかなと思つていた頃。艦長室に繋がる伝声管から本部から通信があると呼び出しを受ける。

俺は急いで船内の連絡室に行き、部下から電伝虫を代わってもらう。あ、やべ誰から電伝虫来てるか聞いてねえや。

「代わりましたシンカイです」

「おお!!やつと出たか!!」

「あ、なんだセンゴクさんか」

声の主は意外にもセンゴクさんだった。……いや、知将と呼ばれ、本部勤めのセンゴクさんから俺に連絡が来るのは割とあることだから「意外」でもなんでも無いんだが。……それ以上にガーブさんから急に呼び出されることの方が多くて、電伝虫が鳴るとガーブさんかと思つてつい身構えちゃうんだよ。

「——いつもガーブがすまんな」

俺の声音に込められた思いを察したのか、センゴクさんが低い声で謝罪してくる。

「いえいえ、こちらこそ気を使ってもらってすいません。それに、ガーブさんに頼られるのは嫌じゃ無いですから。……ちよつと、数が多いですけど」

「……すまん」

「……電話口から聞こえるセンゴクさんの声のトーンがだいぶガチだったが、気にしないようにしましょう。」

「そうじゃない。あの馬鹿野郎のことだ!!」

「ガーブさんがどうかしたんですか?」

センゴクさんは思い出したかのように、声を張り上げ語りだす。

「新世界のエツド・ウオー沖で“金獅子のシキ”とロジャーが戦闘を開始した!」

「へえー、ガーブさんなら飛んで行きそうですね」

俺が出会った頃からガーブさんはゴール・D・ロジャーの逮捕に力を尽くしているし、そのロジャーがほかの誰かに倒されるかもしれないなんて機会があれば積極的に介入していくだろう。そんなことはガーブさんを近くで見ている連中なら誰でも予想ができることだ。

「ああ、ガーブはもうすでに新世界に向けて船を出した!だが、ガーブはともかく、今の

海軍で海上戦でシキとロジャーに圧倒的な有利を取れるのは、お前とクザンしかおらん」

「……話が読めてきました。わかりました。バウナラ・シンカイ中佐、今すぐ海賊の捕縛任務に当たります」

俺の予想通り、ガーブさんはすでに船を出していて、新世界に向かっていているらしい。ただ、電気動力機械類がほとんどないこの世界の帆船は死ぬほど遅い。もうえげつないくらい遅い。かの大天才Dr. ベガパンク本作ではベガパンクが海軍に協力を始めたのが、27年前からとします。原作には24年以上前って書いてあったからセーフによつて船の改良が進んでるらしいが、改良型の帆船はまだ実装されていないしな。

「助かる。俺もすぐに船を出す、伝説級の海賊が二人だ。くれぐれも無茶はするな」
「何言つてんですかセンゴクさん。海の上で俺に勝てる奴なんていませんよ」

……なんかフラグ建てた気がするけど、俺はこれでも人生二回目。能力に胡坐をかいて、油断をするなんてことはない。だが、それでも余裕というものは生まれるものだ。

「(海水に触れている間強化される上に、俺には回復能力である『生々流転』や、転移能力『行雲流水』がある。勝てなくても負けることはそうそうないさ)」

「総員傾注!!!」

「ハッ!!」

「これから、俺たちは金獅子のシキとロジャー捕縛に向けて、新世界のエッド・ウォー沖に向かう!!」

「ハッ!!」

「作戦はいつも通り、プランA。——ただし、今回は海を操る俺と物体を無制限に浮遊させることのできるシキが戦闘をする。くれぐれも、無茶をせずに戦闘海域からは一定の距離を置いて、海賊共の捕縛活動を行ってくれ!!!」

「ハッ!!」

「——というわけだから、グレゴ大尉。操舵はお任せします」

「かしこまりました。では、中佐。早速」

「ええ、わかっています。——それじゃ、全速力で行こうか」

俺は船首に立ち、足の一部を海水化する。海水化した足を延ばし、海と体を同化させる。

体と海が一体になり、周辺の海中にある全てが知覚できるようになる。

「——風防、良し」

俺は船の前方十メートル先に流線型の薄い水の膜を展開する。風よけのバリアだ。これがないと、俺はよくても船がもたないし、なにより甲板にいる兵士たちがダメージを受けてしまう。

「さあ、——フルスロットルだ!!」

船を動かす準備を終えた俺は、周辺の高ごと船を移動させる。

「さすがシンカイ中佐!!帆を閉じてるのに、すげえ速さで船が動くぜ!!」

「そりゃ、シンカイ中佐は海を支配する能力者だからな。——例え、伝説級の海賊二人が相手でも楽勝さ!!」

強化された聴覚が、甲板にいる海兵の声を拾う。……油断するのはよくないことだが、こうやって部下に大丈夫と言われるくらいに強くなれたことは素直に嬉しい。

「——さてと、新世界のエッド・ウォー沖までここからならそう遠くはないから、時速600キロ現実世界の最速の船は時速100キロほどくらいで10時間つてところか」

俺は懐にしまつてある永久指針エタナールポースのうちからエッド・ウォー沖に近い物と、地図を取り出し大まかな時間を計算する。……こうやって船を動かす都合上、航海士としての勉強もしているから抜かりはない。

といつても、さすがに何もせずに海上で十時間は暇すぎるな。

……少し考えごとをしよう。

考えるのは、俺の故郷であるココット島を滅ぼした海賊についてだ。

「まさか、なんにも情報が出てこないとはなあ……」

そう、実は俺が海兵になってから得た地位や情報網を活用しても、あの海賊について新しい情報を得ることはできなかつたのである。

そのため、現状例の海賊についてわかつていることは三つだけしかない。

一つ、何らかの理由で天竜人御用達の茶の名産地ココット島を襲撃したこと。

二つ、六式使い兼覇氣使いの元海軍少将パウナラ・センカイを殺害できるだけの戦闘能力があること。

三つ、何らかの悪魔の実の能力者であるということ。

これだけだ。

だが、これはこの三つの情報しか情報が無いという証拠でもある。

ここから、考えられるパターンは二つ。一つは異常なほどに証拠を残さない狡猾で慎重な海賊であるということ、もう一つは——証拠すら残さないほどの破壊力を持つ海賊であるということ。

前者ならまだ良い。いくら慎重で狡猾でも海軍の総力を挙げれば一人の海賊、一つの手組なら力押しで倒すことはできる。だが、もし海軍の総力を挙げても倒せないレベルなら？ ガープさんですら圧倒するほどの武を持つものだったら？

……正直、考察と言つていいレベルの考えじゃないけど。それでも、あり得ないことがあり得ないのが、このONE PIECE世界だ。

「——本当、難儀な世界に生まれたもんだよ。誰が仇かもわからないなんてな」

俺が船を動かし始め、五時間が経った時だった。

俺の感知圏内に一隻の船が入った。

「——なッ!？」

そして、船を感知したその瞬間。俺の船はレーザーによる攻撃を受けた。

水の膜の屈折率を変化させ、とっさに右に逸らしたが、海面に着弾した光の槍は大きな水飛沫をあげた。

「シンカイ中佐ア!?!何事ですかあ!!」

船員の一人が、焦った表情で俺のいる艦首まで駆け寄ってくる。

「襲撃だ!!大尉をここに呼んでくれ!!」

俺は端的に今、この船に起きた現状を伝え、操舵手であるグレゴ大尉を呼び寄せるように言う。

「お待たせしました中佐。一体何事ですか」

「襲撃です。相手は不明、俺の見聞色の知覚範囲外ギリギリからこの船を狙撃してきました」

「——本当ですか!?それが事実なら」

「.....覇気使いとしての能力も俺以上でしょうね」

「.....」

グレゴ大尉はごくりと息を呑んでいた。恐ろしくなるのもわかる。

俺だつて正直恐ろしい。なにせ、海と一体化して強化されている俺の見聞色より強い見聞色の使い手。

それに加えてあのレーザー。さっきはギリギリ逸らしたが、あの威力だ。掠りでもしたら、確実に軍艦は沈む。くっそ、対ビームコーティングぐらい早く開発しろよ。

「つて、そうじゃねえ!!——グレゴ大尉、俺は今から襲撃者の対処に当たります。船は俺の能力で既に回頭を始めています。大尉はすぐにこの海域から離脱し、マリンフォードに撤退し、本部にこの襲撃者のことを報せてください!!」

「——かしこまりましたッ。中佐もご武運を」

俺は能力で軍艦を回頭させつつ、グレゴ大尉に指示を出す。

いい年した大人が、十三歳のガキに命令されるなんて色々と葛藤があると思う。でも、それでも俺の部下達は葛藤や不満を出さずに従ってくれている。

本当は、俺の命令なんて聞かずに自分で海賊を倒したいと思っただろう。事実、これが戦闘前の海賊だったら我先にと飛び込んでいくのだろう。だが、彼等はジツと自分の内側から湧き上がる思いをこらえてくれている。なぜか、——それは、彼等が海兵だからだ。規律の上に生まれる平和を愛している人たちだからだ。だから、本来守るべき子供に縋っている自分が許せない。と心の中で思っけても、俺を現状の最高戦力と認め、指示に従ってくれている。

俺が、海賊を捕縛することを信じて、だ。

……思えば、ガーブさんを送り出す皆もこんな顔をしていた気がする。

「ついに、俺も託される側になったってことかね。……全く——負けらんねえよなあ」

俺は勢いよく艦首から海へ飛び込む。

普通の人間ならただの飛び込みだが、俺はそのまま手をつき海面に膝をつくことができる表面張力などを強化している。

「さてと、何者かは知らんけど、船だけはやらせないぜ?」

俺は潮流変化ストリームチェンジを行い、蒸気形態スチームムタルへと変わる。変化を完了させた俺は船の周囲の水を蒸発させ、濃い霧を出す。この霧は俺の支配下にあるので、またレーザーが飛んできても屈折率を操作して攻撃を逸らすこともできる。

ついでに、俺の能力が及ぶ範囲の海流を操作し、船をマリンフォードに向けて加速させる。これでとりあえず俺の部下達の命は助かるだろう。海軍本部からの援護はおそらく期待できないだろうが、能力者が相手なら俺の能力を全力で使えば負けはほぼあり得ないだろう。

「——来たッ!!」

霧を生み出して安心した瞬間、先ほどと同じ方向から再びレーザーが飛んでくる。しかも、今度は船じゃ無くてピンポイントで俺を狙っていたらしく、俺は潮流変化を解き、頭部めがけて飛んできたレーザーを武装硬化した腕でレーザーを弾く。

「ツツツツ。クツソ、コレ本当にボルサリーノさんと同じレーザーかよ!? 重みが全然違うぞ!」

腕にダメージこそ無かったがその威力は衝撃的だった。

まさか、ボルサリーノさんが使うレーザーよりも威力が高いとは、想定外だった。

「でもな、伊達にあの人と同門やってないんだよ!!——対レーザー戦の心得見せてやらあ!! 氷天・武装斧槍ハルバードついでに、円形盾ラウンドシールド」

俺は、簡易的に作り出した氷の槍と円形盾を構えて武装色を纏わせてから、レーザーが放たれた方向めがけて走り出した。

「対レーザー戦の心得その一、能力での防御は基本間に合わないから避けるべし!!」

三発、四発と続くレーザーを見聞色の先読みで回避しながら、少しずつ襲撃者に接近する。八尺瓊勾玉相手でも通じる俺の見聞色を近距離に絞って使えば、レーザーの回避もなんとか可能だ。

「対レーザー戦の心得その二、前以て準備をしていれば能力の防御も多少はできる!!」

五発目のレーザーに合わせて用意しておいた水蒸気の壁でレーザーを減衰させる。この水蒸気の壁は、極小の水の粒を混ぜてある特製だ。無論、それでもただの水には変わらないので、せいぜいあと数発しかレーザーを防ぐことはできないだろう。

「だが、この調子なら襲撃者と会敵するまでは壁が持——ハア!？」

しかし、俺の予想に反し、水蒸気の壁は螺旋状に回転するレーザーに吹き飛ばされた。ついでに右手の盾も右腕ごと吹き飛ばされた。クソ痛い。

「いや、違う。そもそもレーザーは螺旋状に回転なんてしない!!コレは、レーザーなんかじゃねえ。光の槍だ!!」

螺旋状に回転する光という不自然極まりない攻撃から、俺は襲撃者の攻撃の本質に当たりをつけた。

まず、自然現象そのものになる自然ロギアにはこんなことはできない。物理法則を超越した物質を得る超パラミシア人もおそらく無理だろう。動物の性質を得る動物ソオンは論外。

だから、螺旋状に回転する光の槍を見たとき、一瞬だけ俺はこの光の槍がそのどれに

も該当しない攻撃だと思った。だが、違う。かなり珍しい可能性だから中々思いつけなかったが、もう一つだけあるんだ。

物語や伝説、人のイメージ通りの力を得ることが出来る最も希少で強力な悪魔の実。
「動物系幻獣種か!!」
ゾオン

ヤケクソになりながら周囲の水蒸気を凍結させつつ、海から氷の壁を隆起させる。一瞬の時間稼ぎにしかならないだろうが、海に入ってしまったえば死ぬことはない俺にとつて、一瞬さえ稼げれば十分だった。

俺は一度海中に潜り腕を瞬時に再構築させる。

……さて、こうなると海上から接近するのは大分キツイ。キツイだけで不可能とは言わないが、それでも相手が水を消滅させることができる以上。海上での接近はかなりリスキーだ。

まあ、俺なら海中深くを進むこともできなくないし、行雲流水で転移しながら近づくのもアリだと思う。

しかし、それでもいつかは海上に上がらないといけない。

海中から攻撃を仕掛けるつてのも手ではあるんだが、やはり致命傷を与えるには覇気を纏った一撃を与えるのが一番確実だからな。接近戦は避けられない。……まー、ぶつちやけるなら、できるだけ海上で粘って相手の攻撃パターンを学習したかったんだ

が、接敵する前に消耗させられるのは癪だ。……海に潜れば全回復するけども。

「——ああ、クソ撃ってきやがった!!」

数秒ほど思考に専念していると、今度は海上から何本も続けて光の槍が海中に向かつて撃ち放たれる。レーザーと性質は似てるが、コイツはレーザーじゃないので、不純物が多い海に着弾しても減衰することが無い。……さつきまではただのレーザーだったのは、単に手を抜いていただけなんだろう。

「だけど、もう見えてるんだよ!!」

強化された見聞色は、俺に敵対者の像を朧気ながら作り上げる。そして、それだけの情報があれば俺は行雲流水を使うことができる。

「——良くもやってくれたな」

身体中から怒気を発しながら、いくつかの水球と共に俺は水面から身体を浮かばせる。

「あらあら、わたくし私の救世の弾丸エアレスング・クーゲルを掻い潜ってきた海兵さんが、まさかこんなに可愛らしい方だなんて。マリア、貴方もご覧なさい!!」

「お姉様。そうは言っても小さくても海兵は海兵です。さっさと殺してしまいましう」

「あらあら、そんなことを言わないの。全く、すぐに殺したら面白く無いでしょう？——それに、これから楽しませてくれるのでしょうか？」

「ああ、存分に楽しませてやるさ」

俺は全身の覇気を昂ぶらせ、本格的な戦闘状態に移行した。

「ほら、海兵さんもそう言ってくれたことですし。マリアもこの出会いと闘争を楽しみましょう」

「……私が出るほどの相手ではないと思うので、お姉様一人で戦ってくださいまし」

「あらそう、残念ね。じゃあ私一人で楽しませていただきますわ」

すると、お姉様と呼ばれた女海賊は背中から神々しい光の翼を出し、フワリと空に浮かんだ。その女海賊の離陸に合わせ、軍艦は徐々に後ろに後退する。……帆船は普通、前にしか進まないの、おそらくこれも何らかの悪魔の実の力なんだろうが。残念ながら、今それを追求できるような余裕は俺には無かった。

「私は救世船団・団長、メサイア。今日限りの縁ですが、楽しく踊りましょうね。小さな海兵さん？」

そう言つて、お姉様と呼ばれた女海賊は爛々と光る赤い目をこちらに向け、紅いドレスのスカートの裾をつまみお辞儀をした。

「バウナラ・シンカイ中佐——せいぜい楽しく踊らせて貰うさ!!!」

瞬間、俺は海面から数百本の高圧水流をメサイアに向けて放出した。この技は水天・百目鬼とどめき。水天・渦潮のように貫通力や効果範囲の広い技じゃないが、それでも海面から無尽蔵に供給される水を使った数百本のウォーターカッターは避けにくい。しかし、メサイアは光の翼を発光させるだけで、自分に命中する水だけを蒸発させた。

「あら、この程度かしら?」

「そうだと思ふか?——水天・九頭竜!!」
くずりゅう

俺は微笑みかけるメサイアめがけて、海面から竜を模つた九つの水流を撃ち込む。九頭竜は百目鬼で放つウォーターカッターのような早さや制圧力はない。しかし、リアルタイムで九つの竜を制御しているため、威力・誘導性は百目鬼よりも強い。

「何を模つていても、所詮は水。私の羽ばたきで消える定め——あら?」

荒れ狂う九匹の竜は翼から放たれる衝撃はを喰らい弾かれるも、消えること無くメサイアへと向かう。

「「こちらの皆さんは羽ばたきだけでは消せないのね。なら、これはどうかしら?」
ワンダー・シユヴェルト下!」
奇跡の剣!!!」

メサイアは竜の顎をひらりと躲し続けながら、九本の光の剣を生み出し、九頭竜めがけて打ち出した。

「(早いッ)——グッ!」

文字通り光の速さで移動する剣は、全て竜に突き刺さる。

「だが、そんな程度の攻撃に、止められるかよッ!!」

俺の意思に答えるかのように九頭竜は光の剣を噛み砕き、再びメサイアに襲いかかる。

「畳み掛ける! 氷天・山嵐!!」

次いで、俺は自分を中心とした半径百メートルほどの海面から、数千もの鋭い氷柱を打ち出し続ける。九つの竜に幾千の氷柱、これを回避できる術はいくらメサイアとは言えは無いはずだ。それに、俺の見聞色も竜の顎がメサイアに食らいつく瞬間を見せている。

「(これで倒せるとは思えないが、初撃は貰った——)」

「あらあら、素晴らしいですね。でも、私潮水は嫌いなのです」

「なんだと……ッ!」

だが、俺の目に映ったのは予想を超える光景だった。

「(——竜が、氷柱が空中で静止している!?)」

「よそ見をしていて良いのかしら？」

「しまっ!？」

あまりの光景に目を奪われた隙にメサイアの接近を許した俺は、メサイアの武装硬化した拳の一撃を貰ってしまった。

「くっ……」

俺は吹き飛ばされた右腕を足から海水をくみ上げ再生させる。

「——やっぱり、素晴らしいですわね」

その光景を見て、メサイアは恍惚とした表情でそう言った。

「何がだ」

「その悪魔の実がですわ。——おそらく、自然系^{ロギア}ウミウミかミズミズといったところで

しょうか？」

「——そうだ。俺の食した悪魔の実は自然系^{ロギア}ウミウミの実だ」

これだけ能力を曝け出しているのだからと、俺は特に隠すこともせず自分が食した悪魔の実の名前を言った。

「液体に転じ、周囲の液体を操る力。能力者に圧倒的な優位を持てる上に、その再生能力。海上なら負けることはまずあり得ない。——賞賛するに値する悪魔の実ですわ」

息を荒くしながら俺の食した悪魔の実について語るメサイア。——戦闘を楽しむ、と

言うだけあって戦闘狂らしい彼女は、ずいぶんと饒舌だった。

「…………お前の悪魔の実には負けるけどな。光の翼に、光の剣。さらには空中の物体の静止。一体、何の悪魔の実を食べたんだ」

だから、俺は負ける気も無いが勝ち目が見えない戦いに打開策を見出すために、なんとなくその問いかけを口にした。

「あら、あらあらあら!!! 貴方、私の食した悪魔の実に興味があるのかしら!!!」

「そりゃ気になるさ」

「なら、教えてあげて差し上げる」

「私の食した悪魔の実。それは——」